

(1) 文化ホール

対象施設

- ・市に4箇所ある文化ホールは、座席数が約200席～600席と様々であり、中でも春日公民館が最も多い。
- ・建物の規模は、約1,000㎡～5,000㎡と様々であり、中でも春日公民館が最も規模が大きい。

施設名	小学校区	建築年度	経過年数	延床面積(㎡)	敷地面積(㎡)	一次評価結果(案)		
						ハード偏差値	ソフト偏差値	区分(※)
小田井公民館	古城	1990	28	1,283	不明	51.3	48.1	C
清洲市民センター (中央公民館)	清洲東	1979	39	3,109	3,578	41.0	47.7	D
新川地域文化広場 (カルチバ新川)	星の宮	1995	23	1,820	10,942	48.4	51.4	B
春日公民館	春日	1989	29	4,715	7,604	45.3	47.7	D

(※)一次評価の判定区分

区分	A	B	C	D
ハード	○	×	○	×
ソフト	○	○	×	×

○：偏差値≥50
×：偏差値<50

施設の現状と課題

<ハード面>

- ・文化ホールは、全ての施設で建築後の経過年数が20年を超えており、特に清洲市民センターの老朽化が進行している。
- ・カルチバ新川は、他の文化ホールよりも新しい施設であるものの、経年劣化等に伴う修繕が多い。

<ソフト面>

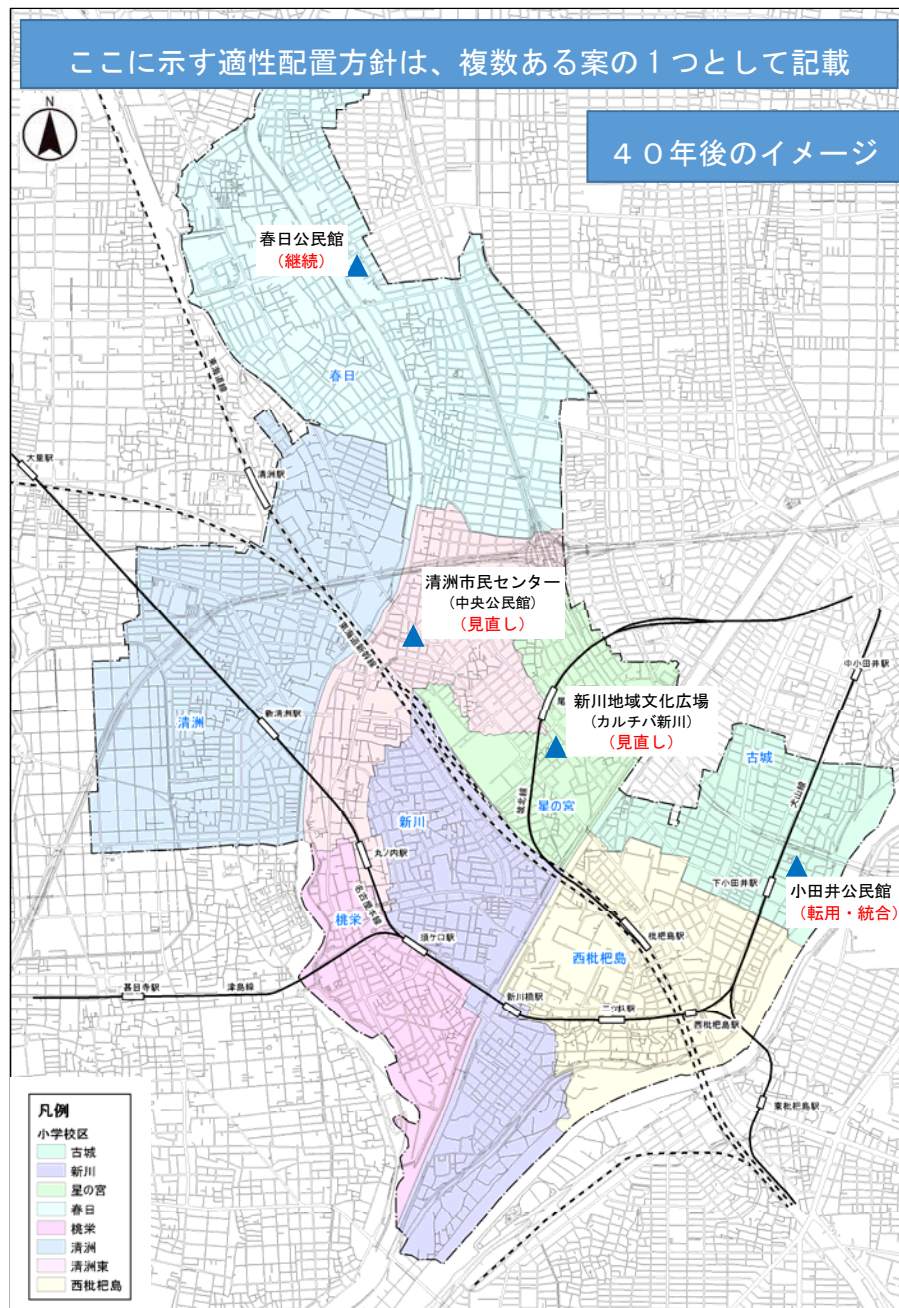
- ・どの施設においても、1日当たり午前・午後・夜間の3コマ、年間で900コマ程度の利用が可能であるが、実際は年間120～250コマの利用にとどまっている。
- ・春日公民館は、貸室の利用料金が近隣市町よりも低く、市外からの利用が増加傾向にある。
- ・小田井公民館は、あまり老朽化が進行していないが、利用率が低い状況である。

二次評価における考え方

人口減少社会では施設の供給過剰の可能性があることから、施設の老朽化の実態や将来を含めた利用状況を鑑み、考慮していく。まず、利用率の向上や施設を1箇所へ集約するなどの検討が必要である。一方、機能面でも市民の文化活動や交流の活性化に向け、集約に伴う施設のリニューアルを行うことで、より質の高い空間を整備する。

ここに示す適性配置方針は、複数ある案の1つとして記載

40年後のイメージ



二次評価(案)

(2) 集会施設

対象施設

- ・集会施設は、市内に7箇所設置されており、卓球やダンス等の活動で利用されている。
- ・建物の規模は、500㎡から2,200㎡程度と様々であり、中でも500㎡未満の小規模な施設が多い。

施設名	小学校区	建築年度	経過年数	延床面積(㎡)	敷地面積(㎡)	一次評価結果(案)		
						ハード偏差値	ソフト偏差値	区分(※)
西枇杷島会館	西枇杷島	1971	47	2,010	不明	31.5	47.4	D
西枇杷島勤労福祉会館 (にしびさわやかプラザ)	西枇杷島	2004	14	2,200	2,555	61.2	48.1	C
水の交流ステーション	西枇杷島	2013	5	372	454	68.8	50.9	A
庄内川水防センター (みずとびあ庄内)	西枇杷島	2005	13	460	3,015	65.8	—	—
清洲コミュニティセンター	清洲	1988	30	298	331	48.3	48.6	D
朝日公民館	清洲東	1980	38	374	626	56.1	47.2	C
新川ふれあい防災センター ー:集会施設	新川	1970	48	1,026	5,504	41.7	47.0	D

(※)一次評価の判定区分

区分	A	B	C	D
ハード	○	×	○	×
ソフト	○	○	×	×

○:偏差値 ≥ 50

×:偏差値 < 50

施設の現状と課題

<ハード面>

- ・西枇杷島会館と新川ふれあい防災センターは、ともに建築後50年程度経過しており、老朽化が進行している。特に、新川ふれあい防災センターは、躯体そのものの老朽化が進行しており、抜本的な解決が必要な状況である。
- ・西枇杷島会館は、公の施設の中で、唯一耐震性能が確保されていない施設である。

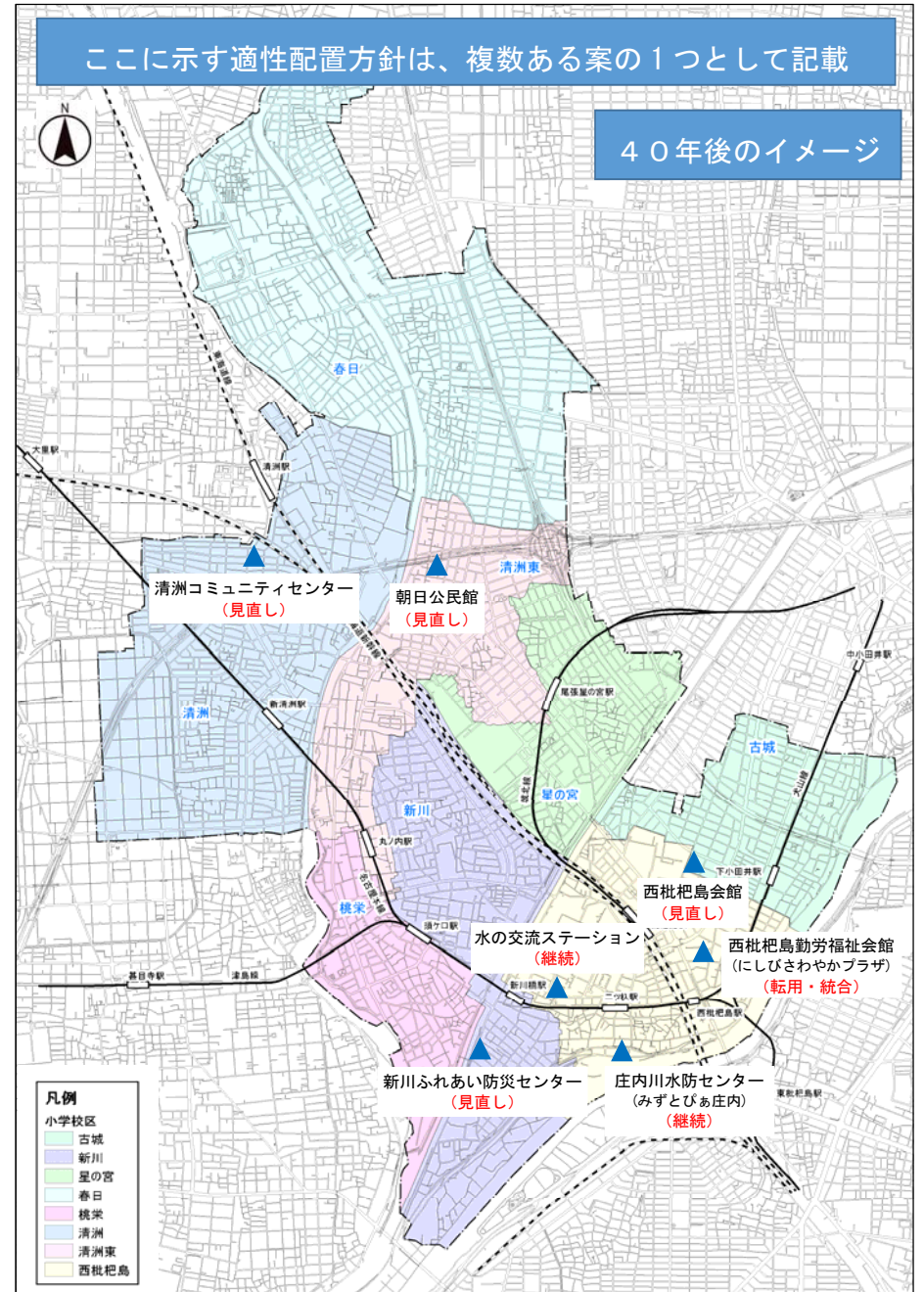
<ソフト面>

- ・集会施設は、本来、不特定多数の市民に利用されることを想定しているが、以下の施設は基本的に特定の団体または地区の利用が主体となっている。
- ✓清洲コミュニティセンター、朝日公民館、水の交流ステーション、新川ふれあい防災センター、庄内川水防センター(みずとびあ庄内)

二次評価における考え方

規模が大きく比較的新しい施設は、市民ニーズに合わせて、統合や他の機能への転用などの選択肢を視野に入れながら、利用率などのソフト面での向上を図る一方で、規模が大きくとも老朽化が進行している施設は、躯体状況を見ながら施設そのものの見直しを含めて検討する。

小規模な集会施設は、基本的に特定の地区の利用が主体となっていることから、地区集会所と比較し、機能や役割上の整理が必要となる。



二次評価(案)

(3) スポーツ施設

対象施設

- ・プールと体育館は、市内に2箇所ずつ設置されており、どの施設も建築後20年以上経過している。
- ・ARCO清洲は、敷地面積と延床面積ともに最も大きく、市の中心部に位置している。

施設名	小学校区	建築年度	経過年数	延床面積(m ²)	敷地面積(m ²)	一次評価結果(案)		
						ハード偏差値	ソフト偏差値	区分(※)
清洲勤労福祉会館(ARCO清洲):プール	清洲東	1994	24	6,049	17,458	44.1	52.2	B
清洲勤労福祉会館(ARCO清洲):体育館	清洲東	1994	24	6,049	17,458	44.1	52.2	B
新川地域文化広場(カルチバ新川):プール	星の宮	1995	23	1,820	10,942	48.4	51.4	B
春日B&G体育館	春日	1982	36	1,576	3,595	52.5	51.1	A

(※)一次評価の判定区分

区分	A	B	C	D
ハード	○	×	○	×
ソフト	○	○	×	×

○: 偏差値 \geq 50

×: 偏差値 $<$ 50

施設の現状と課題

<ハード面>

- ・ARCO清洲とカルチバ新川は、ともに建築後20年以上が経過し、建物及び備品等の老朽化が進んでいることから、毎年、施設改修等に大きな経費が見込まれている。
- ・ARCO清洲とカルチバ新川は、ともに吊天井等の非構造部材の耐震改修が必要な状況である。
- ・春日B&G体育館は、平成29年度に大規模改修を実施しており、利用率も向上している。

<ソフト面>

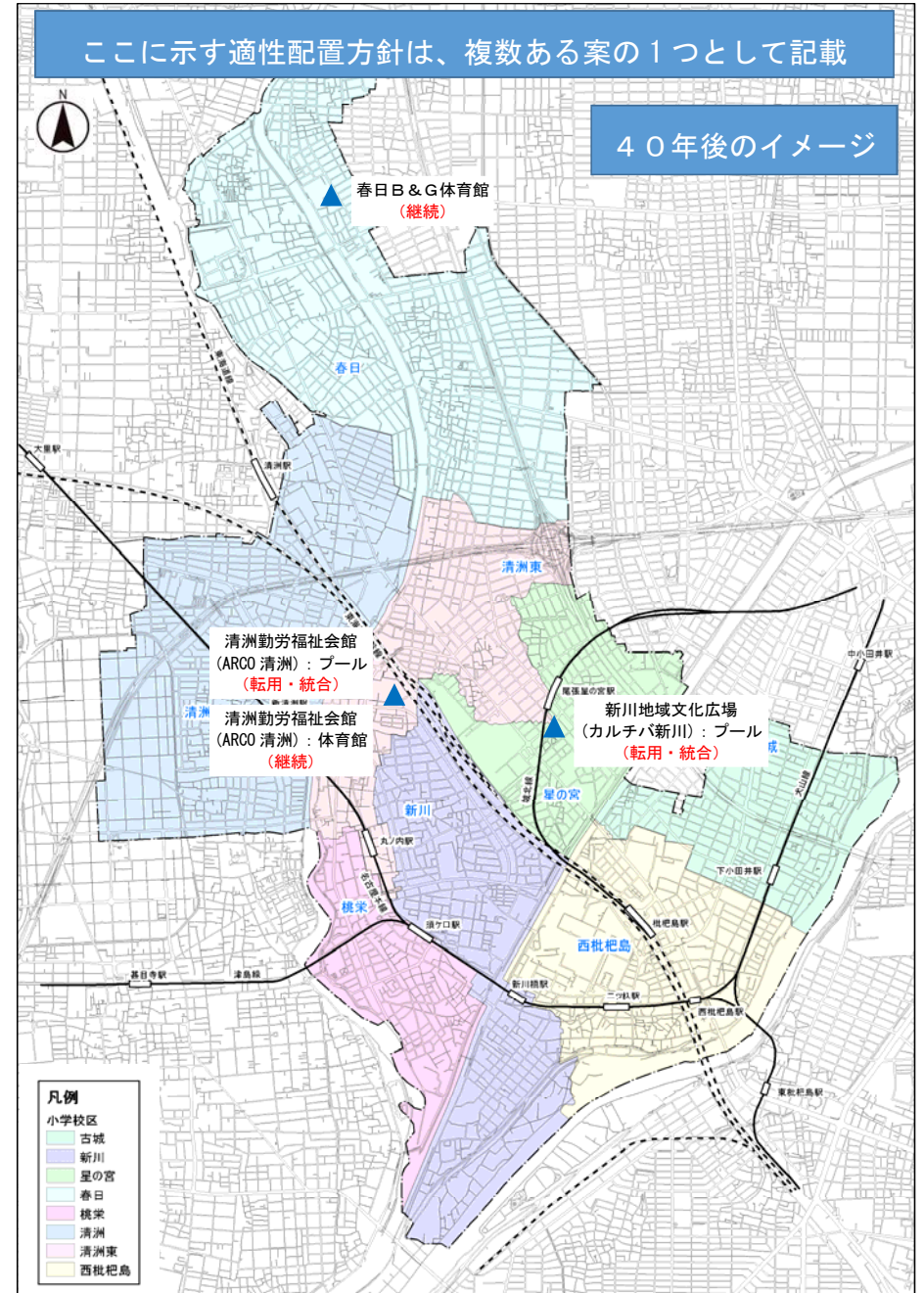
- ・プールは、毎年、施設管理費や整備費等の多額の維持コストがかかっている。
- ・学校体育館を含め、市全体としての体育館の利用需要が高い。

二次評価における考え方

市内に2箇所あるプールは、老朽化の実態や利用状況等の観点から、両施設を保有する必要性を含め、施設のあり方について検討する。また、体育館は、利用面で飽和状態に達していることから、現状の規模を維持しつつ、小中学校の体育館を含めたより効率的な活用を推進していく。

ここに示す適性配置方針は、複数ある案の1つとして記載

40年後のイメージ



二次評価(案)

(4) 教養・文化施設

対象施設

- ・図書館と美術館は、市内に1施設ずつ設置されており、ともに建築後20年程度が経過している。
- ・飴茶庵と西枇杷島問屋記念館は、昔の建物を改築し有効活用を図っている。

施設名	小学校区	建築年度	経過年数	延床面積(m ²)	敷地面積(m ²)	一次評価結果(案)		
						ハード偏差値	ソフト偏差値	区分(※)
西枇杷島問屋記念館	西枇杷島	1993	25	152	1,440	37.8	-	-
清洲城・天主閣	清洲東	1988	30	773	不明	44.7	-	-
清洲城・芸能文化館	清洲東	1988	30	331	不明	44.7	-	-
清洲城・蔵	清洲東	1988	30	108	不明	29.8	-	-
清洲ふるさとのやかた	清洲	1992	26	492	635	53.2	-	-
飴茶庵	新川	不明	-	94	不明	-	-	-
市立図書館	春日	1997	21	3,436	5,529	56.2	53.2	A
はるひ美術館	春日	1999	19	696	不明	55.3	45.8	C

(※)一次評価の判定区分

区分	A	B	C	D
ハード	○	×	○	×
ソフト	○	○	×	×

○：偏差値≥50

×：偏差値<50

施設の現状と課題

<ハード面>

- ・市立図書館とはるひ美術館は、比較的施設が新しいものの、歴史的施設については、建築後30年以上を経過している施設や、昔の建物を改築した施設がある。

<ソフト面>

- ・はるひ美術館の来館者は、ここ数年は毎年1割弱減少しており(平成29年度:約14,000人(50人/日)程度)、来館者の増加が課題である。
- ・はるひ美術館と市立図書館は、夢広場はるひを含めた併設施設であるが、図書館以外は利用者が少ない。
- ・清洲城周辺は、桜の開花時期に人で賑わうものの、清洲城や清洲ふるさとのやかたは、年間を通して集客が悪く、入場者数は減少傾向にある。

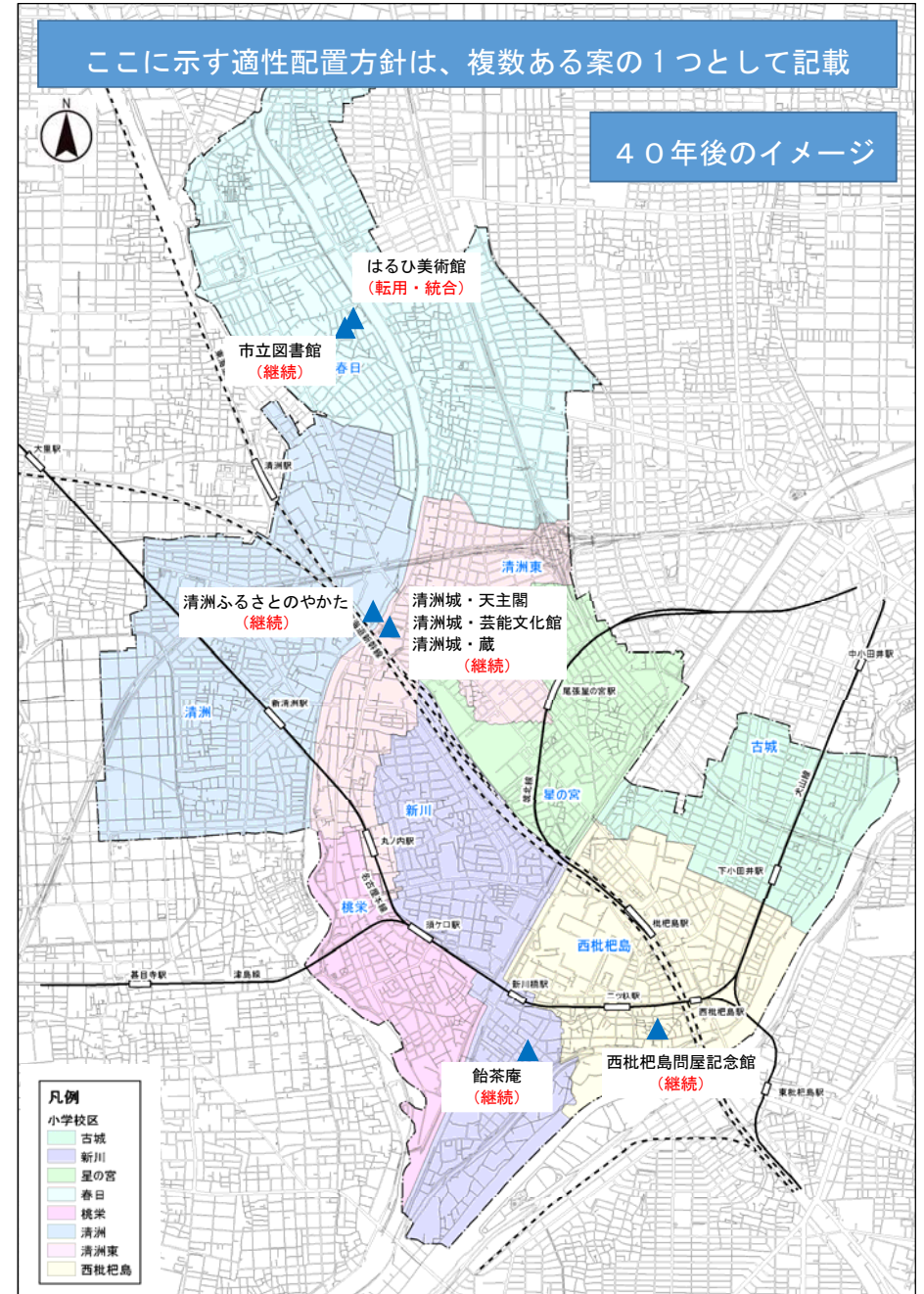
二次評価における考え方

市立図書館および美術館ともに、市内で唯一の機能を有し、ハード偏差値もよい。ただし、美術館の利用率は低く、市に設置する意義を含め、夢広場一体の利活用を検討する必要がある。

清洲城、ふるさとのやかた等の歴史的建造物は、観光客の減少が続いており、観光振興に向けて単体での活用では限界があることから、面的な整備を図るとともに、民間活力等を活用するなどした一元的な整備が必要である。

ここに示す適性配置方針は、複数ある案の1つとして記載

40年後のイメージ



二次評価(案)

(5) 小・中学校

対象施設

- ・学校は、長寿命化改修を実施済み(実施中)であるが、建築後40年経過した施設が大半を占めている。
- ・特に、清洲小学校と新川小学校は、建築後63年を経過している状況である。

施設名	小学校区	建築年度	経過年数	延床面積(m ²)	敷地面積(m ²)	一次評価結果(案)		
						ハード偏差値	ソフト偏差値	区分(※)
西枇杷島小学校	西枇杷島	1987	31	8,771	19,258	52.8	58.1	A
古城小学校	古城	1975	43	5,619	17,811	54.9	53.0	A
清洲小学校	清洲	1955	63	9,134	18,906	50.4	56.2	A
清洲東小学校	清洲東	1980	38	5,867	19,884	56.2	51.9	A
新川小学校	新川	1955	63	7,840	16,090	47.8	51.1	B
星の宮小学校	星の宮	1974	44	4,871	13,492	54.5	52.6	A
桃栄小学校	桃栄	1990	28	5,501	10,456	60.5	58.4	A
春日小学校	春日	1969	49	6,925	19,223	53.0	52.5	A
西枇杷島中学校	西枇杷島	1960	58	10,411	34,558	49.1	58.8	B
清洲中学校	清洲	1969	49	8,844	29,857	53.0	52.5	A
新川中学校	新川	1970	48	9,056	28,874	55.4	51.8	A
春日中学校	春日	1977	41	5,916	17,383	55.0	58.8	A

(※)一次評価の判定区分

区分	A	B	C	D
ハード	○	×	○	×
ソフト	○	○	×	×

○ : 偏差値 ≥ 50
× : 偏差値 < 50

施設の現状と課題

<ハード面>

- ・小中学校は、校舎及び体育館の耐震化工事に加え、長寿命化改修工事を行っており、基本的には、複合化により他施設を受け入れる拠点となる施設である。一方、改修工事等を行った施設の中でも、建築後の経過年数が目標耐用年数の80年に近く、ハード偏差値が低いものが見られる。

<ソフト面>

- ・清洲小学校と清洲東小学校は、宅地開発等の影響により児童数が増加し、現在では児童数が飽和状態になっている。
- ・市全体としての総児童数は増加している一方で、一部の地域では既に児童数が減少傾向に転じている。
- ・土地区画整理の影響により、今後も一時的に児童数が増加する地区があるが、40年後には減少する見込みである。
- ・現在のクラスは少人数制のため、児童数が少ない場合でも、必要な教室数が多くなる傾向にある。

二次評価における考え方

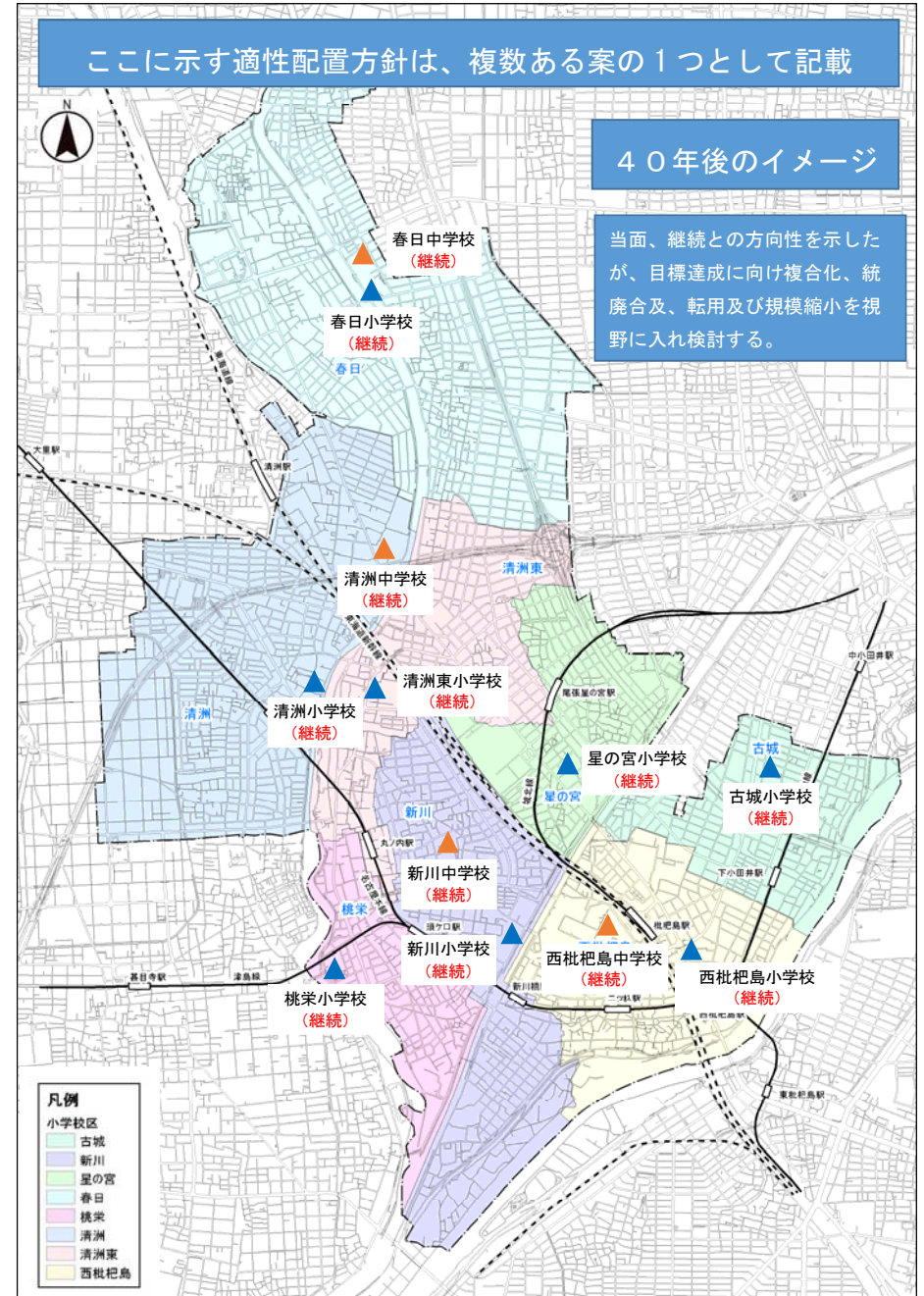
現状で市内に小規模校はなく、一部の学校では児童数が増加傾向にあるものの、将来的には総児童数が減少する見込みであることから、学校教育の充実を視野に、地域の実情に応じて他の公共施設との複合化を図るとともに、長期的には、公共施設の延床面積の約半数を占める学校の統廃合や転用を検討していく。

また、複合化等を検討した上で、児童福祉や地域コミュニティの拠点としての機能を有する、新たな教育環境の整備を進めていく。施設の更新時には、児童生徒数の減少に合わせ、施設規模を縮小することで、コンパクトで充実した施設整備を行う。

ここに示す適性配置方針は、複数ある案の1つとして記載

40年後のイメージ

当面、継続との方向性を示したが、目標達成に向け複合化、統廃合及、転用及び規模縮小を視野に入れ検討する。



二次評価(案)

(6) 幼稚園・保育園

対象施設

- ・幼稚園・保育園は、各小学校区に1箇所以上あり、市内には全14施設が設置されている。
- ・保育園は、建築後40年を経過した建物が多数あり、老朽化が進行している状況である。

施設名	小学校区	建築年度	経過年数	延床面積(m ²)	敷地面積(m ²)	一次評価結果(案)		
						ハード偏差値	ソフト偏差値	区分(※)
西枇杷島第1幼稚園	古城	1970	48	1,323	2,889	44.9	53.4	B
西枇杷島保育園	西枇杷島	1984	34	1,208	1,802	49.1	46.3	D
芳野保育園	西枇杷島	2016	2	882	1,766	70.6	48.3	C
本町保育園	清洲東	1980	38	1,002	3,785	39.9	48.4	D
一場保育園	清洲	1967	51	523	2,258	28.4	49.0	D
花水木保育園	清洲	2011	7	2,026	3,174	67.7	48.3	C
新清洲保育園	清洲	1974	44	937	2,069	51.3	48.4	C
朝日保育園	清洲東	1975	43	725	2,290	43.9	49.7	D
須ヶ口保育園	新川	2010	8	1,631	3,632	57.8	49.9	C
土器野保育園	新川	2003	15	1,064	2,144	52.8	44.9	C
桃栄保育園	桃栄	1970	48	1,342	4,762	30.1	50.4	B
星の宮保育園	星の宮	1977	41	990	4,045	45.7	45.5	D
中之切保育園	春日	1971	47	1,035	3,435	31.3	51.0	B
ネギヤ保育園	春日	1971	47	1,321	2,679	45.8	51.1	B

(※)一次評価の判定区分

区分	A	B	C	D
ハード	○	×	○	×
ソフト	○	○	×	×

○ : 偏差値 ≥ 50

× : 偏差値 < 50

施設の現状と課題

<ハード面>

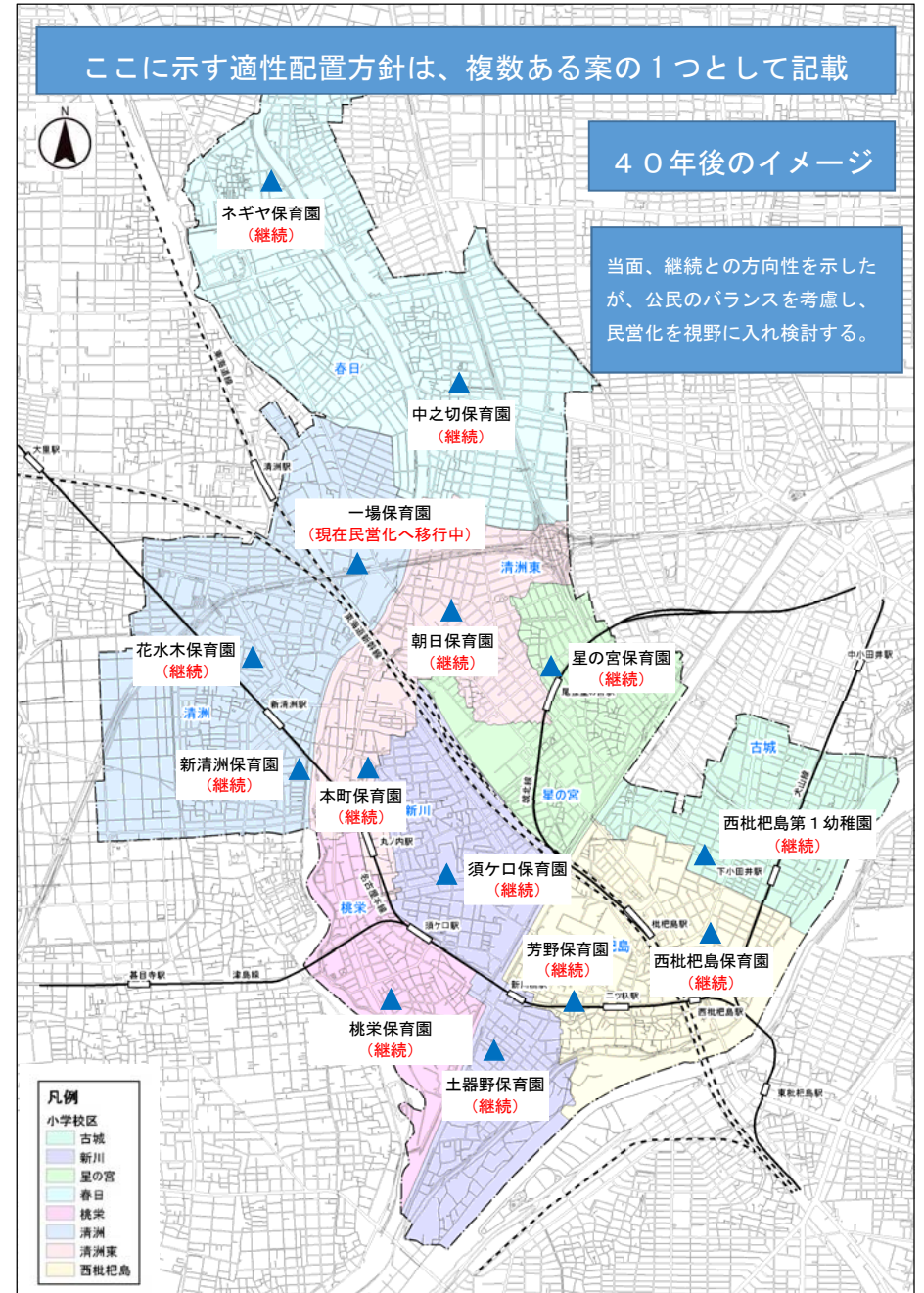
- ・14施設中、約40年経過した施設が9施設あり、保育園全体で老朽化が進行している状況である。
- ・大規模改修を行っていない桃栄保育園、星の宮保育園、中之切保育園は、特に老朽化が進んでおり、対応が必要である。

<ソフト面>

- ・入園にあたっては、施設単位ではなく、市内全域で一括して入園希望を受け付ける運用を行っている。

二次評価における考え方

近年の保育需要の高まりへの対応のため、保育園の規模は、当面、現状を維持するものとする。一方で、将来的には年少人口の減少が見込まれるとともに、民間事業者による保育サービスの提供が進んでおり、豊富な教育カリキュラムなど、多様な工夫がみられるようになってきている。このような状況を踏まえ、既存園の民営化も視野に入れ、多様化する保育ニーズへの対応を目指すものとし、その際、公民のバランスを考慮した施設配置を検討していく。



二次評価(案)

(7) 児童館・子育て支援センター

対象施設

- ・児童館（児童センター）は、各小学校区に1施設ずつあり、0歳から18歳未満の市民が利用している。
- ・児童館や子育て支援センターの約半数が建築後40年以上を経過しており、老朽化が進行している。

施設名	小学校区	建築年度	経過年数	延床面積(m ²)	敷地面積(m ²)	一次評価結果(案)		
						ハード偏差値	ソフト偏差値	区分(※)
西枇杷島児童館	西枇杷島	1979	39	306	1,425	45.6	46.6	D
小田井児童館	古城	1990	28	440	2,694	51.3	49.4	C
清洲児童館	清洲	1978	40	400	612	40.1	44.8	D
桃栄児童館	桃栄	1992	26	294	533	52.5	47.8	C
春日児童館	春日	1990	28	494	485	53.3	52.0	A
清洲児童センターウイング	清洲東	2003	15	453	1,059	60.8	48.8	C
新川児童センター	新川	2016	2	378	955	70.6	46.9	C
星の宮児童センター	星の宮	2006	12	948	1,994	60.6	54.8	A
西枇杷島子育て支援センター	西枇杷島	2016	2	65	1,770	70.6	18.3	C
清洲子育て支援センター	清洲東	1980	38	58	3,257	39.9	15.2	D
新川子育て支援センター	新川	1968	50	146	3,731	40.5	39.6	D
春日子育て支援センター	春日	1971	47	90	3,435	31.3	30.7	D

(※)一次評価の判定区分

区分	A	B	C	D
ハード	○	×	○	×
ソフト	○	○	×	×

○：偏差値 ≥ 50

×：偏差値 < 50

施設の現状と課題

<ハード面>

- ・児童館は、小学生の放課後児童クラブで利用されているが、小学校の敷地外にあるため、行き帰りの利便性の低下と児童の安全性が懸念される。

<ソフト面>

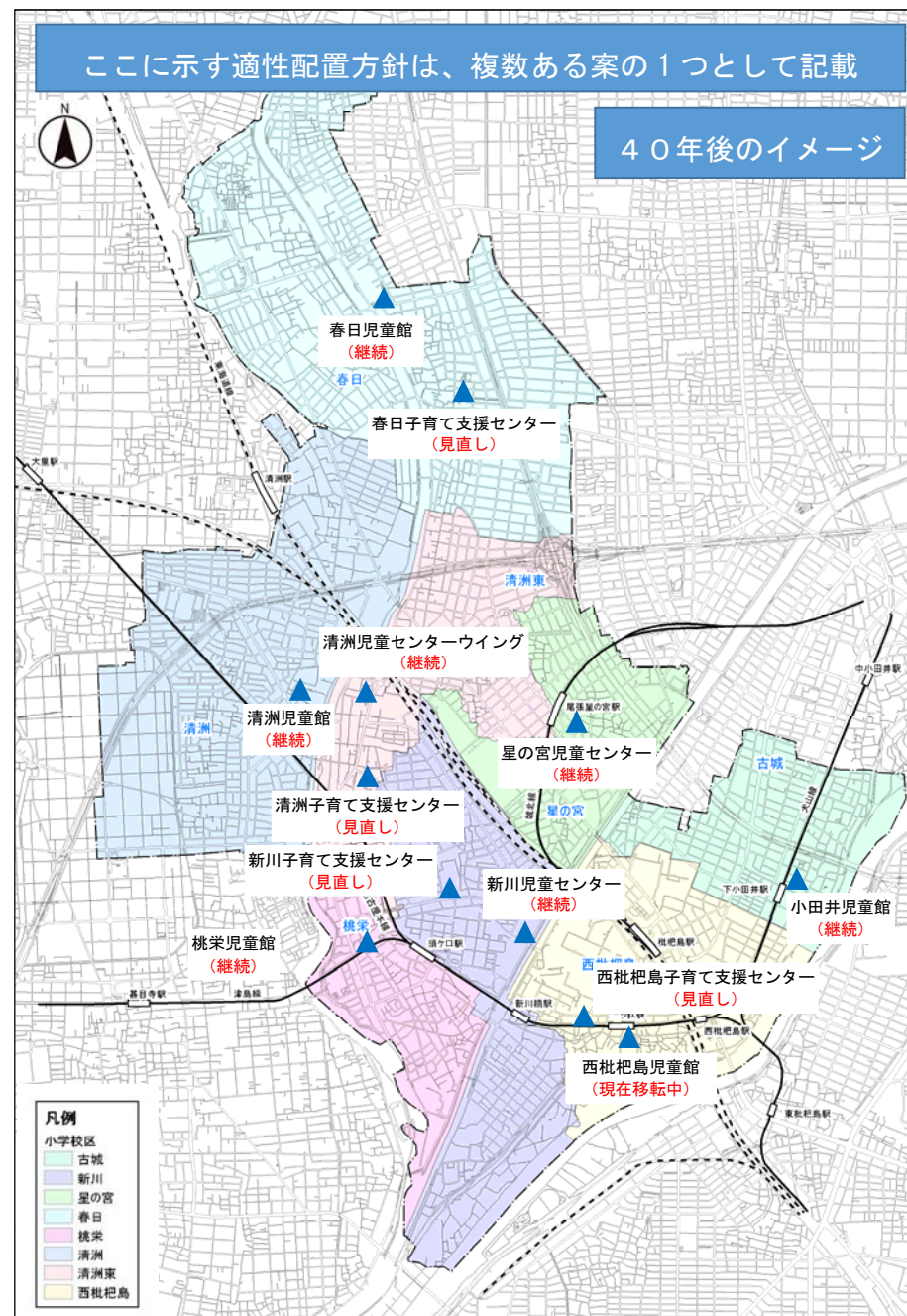
- ・各地区の子育て支援センターで行う事業は、児童館・児童センターで午前中に行う内容と重複している。
- ・子育て支援センターはソフト評価が良好であるものの、午前中に利用が集中している。

二次評価における考え方

児童館・児童センターと子育て支援センターは、未就学児の遊び場などの機能が重複していることから、小学校区に1箇所設置することを基本に、施設の集約によるリニューアルを進め、機能強化と利用環境の充実を図る。将来的には、児童の安全面や教育上の観点を考えて、学校の空き教室等を利用した複合化を検討していく。

ここに示す適性配置方針は、複数ある案の1つとして記載

40年後のイメージ



二次評価(案)

(8) 福祉施設

対象施設

- 福祉施設は、中学校区ごとに1~3箇所設置されており、高齢者の健康増進を目的に、無料で利用できる状況である。
- 清洲総合福祉センターを除く福祉施設は、ほとんどが建築後30年以上を経過している。

施設名	小学校区	建築年度	経過年数	延床面積(m ²)	敷地面積(m ²)	一次評価結果(案)		
						ハード偏差値	ソフト偏差値	区分(※)
西枇杷島老人福祉センター	西枇杷島	1979	39	876	1,506	45.6	56.6	B
清洲総合福祉センター	清洲	2003	15	5,219	6,612	57.6	59.0	A
新川福祉センター	新川	1982	36	673	1,581	48.6	53.5	B
春日老人福祉センター	春日	1980	38	1,081	2,283	46.2	58.7	B
西枇杷島生きがいセンター (にしび創造センター)	古城	1990	28	1,784	2,701	51.3	59.5	A
老人憩の家	西枇杷島	1977	41	68	308	39.5	—	—
春日老人福祉センター3階 (県貸付)	春日	1980	38	1,125	2,283	—	—	—

(※)一次評価の判定区分

区分	A	B	C	D
ハード	○	×	○	×
ソフト	○	○	×	×

○：偏差値≥50

×：偏差値<50

施設の現状と課題

<ハード面>

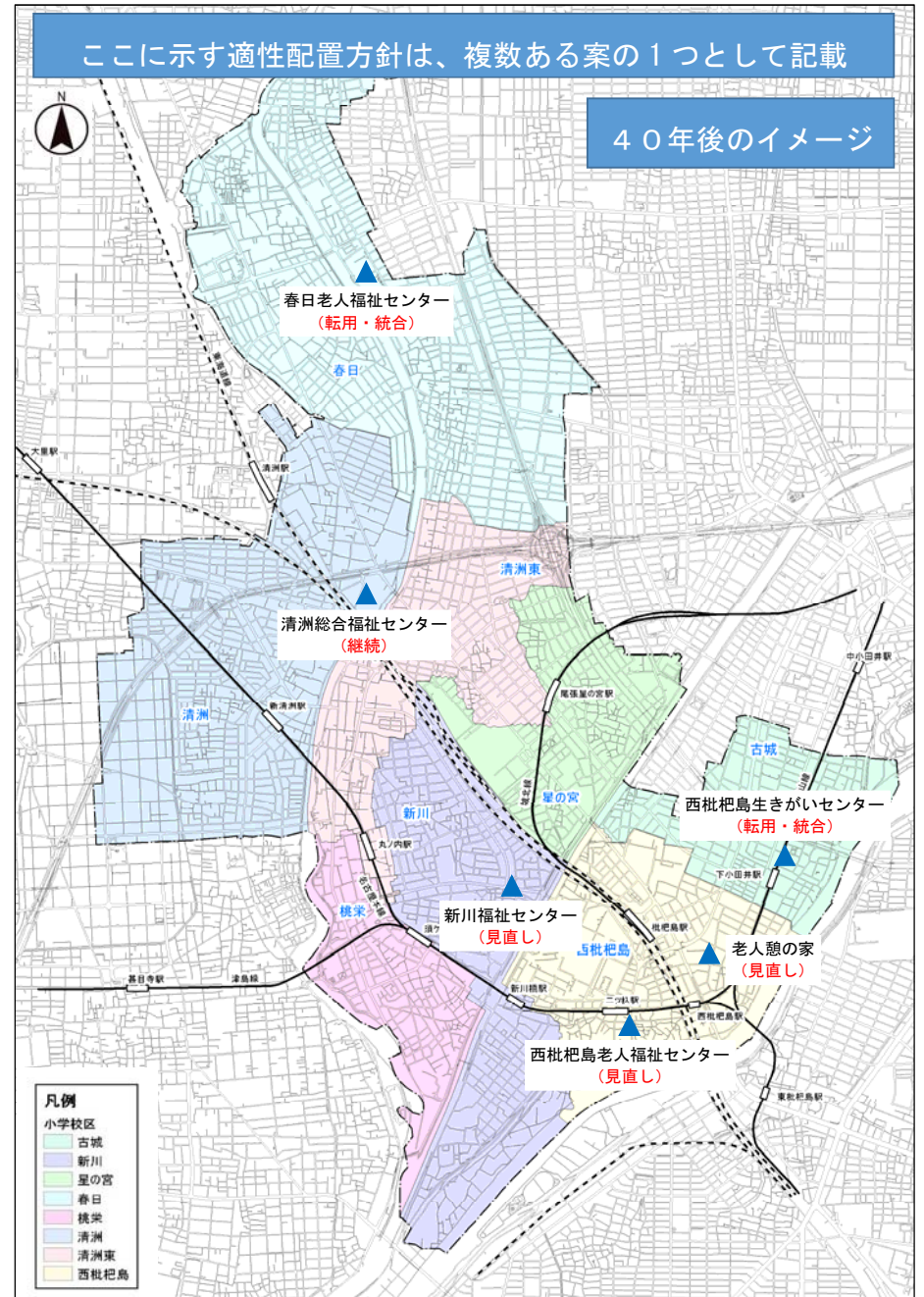
- 西枇杷島中学校区には3施設が混在しており、機能の重複が生じている状況である。
- 清洲総合福祉センターは、延床面積が5,000m²以上あり、施設内は空間的に余裕を持たせた作りとなっている。
- 清洲総合福祉センター以外は、総じてハード偏差値は低い。

<ソフト面>

- 清洲総合福祉センターは、社会福祉協議会の活動拠点として運営されている。
- 福祉施設の利用実態は、囲碁・将棋・カラオケ等が多く、必ずしも福祉施設で行う必要はない。

二次評価における考え方

高齢者が要介護状態にならないためには、健康体操等の活動を市が提供することが効果的であり、そのためには高齢者が気軽に利用できるような地元の集会所単位でのサービス提供が望ましい。人生100年定年延長の時代を鑑み、高齢者の生きがいのあり方も併せて考える必要がある。



二次評価(案)

(9) 保健センター

対象施設

- ・保健センターは、旧町ごとに1箇所ずつ設置されており、主に市民の検診の際に利用されている。
- ・建物の規模は、全施設ともに、概ね500㎡から800㎡程度となっている。

施設名	小学校区	建築年度	経過年数	延床面積(㎡)	敷地面積(㎡)	一次評価結果(案)		
						ハード偏差値	ソフト偏差値	区分(※)
西枇杷島保健センター	西枇杷島	2004	14	784	2,555	61.1	—	—
清洲保健センター	清洲	1978	40	607	1,289	45.6	—	—
新川保健センター	新川	1982	36	545	1,581	51.6	—	—
春日保健センター	春日	1980	38	672	2,283	48.8	—	—

(※)一次評価の判定区分

区分	A	B	C	D
ハード	○	×	○	×
ソフト	○	○	×	×

○：偏差値 ≥ 50

×：偏差値 < 50

施設の現状と課題

<ハード面>

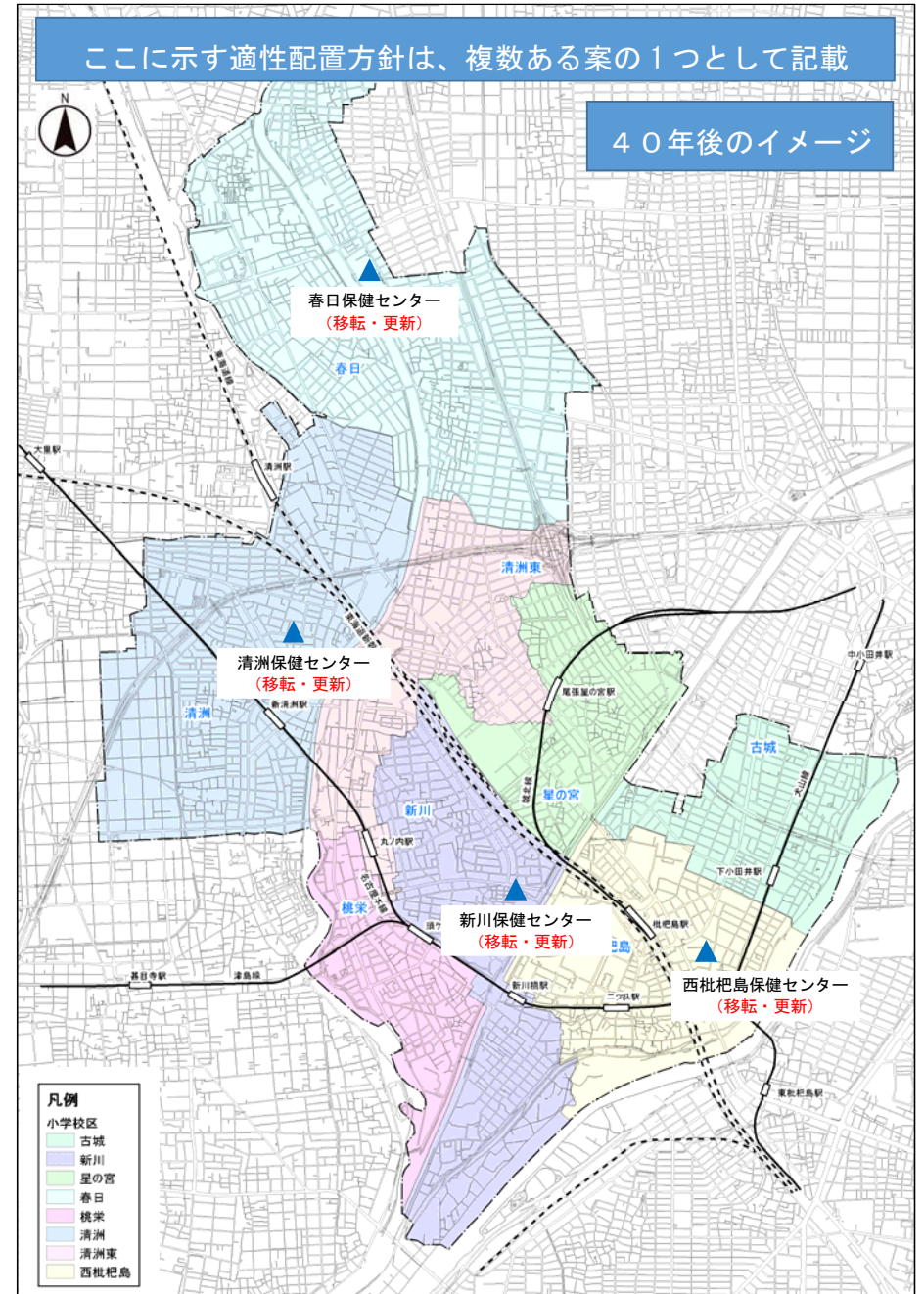
- ・西枇杷島保健センターを除き、建築後の経過年数が40年程度となっており、保健センター全体の建物の老朽化が進展している。
- ・特に清洲保健センターにおいては、構造躯体に大きなひび割れが生じているなど、構造的な耐久性に課題がある状況となっている。

<ソフト面>

- ・それぞれの開館日数は、年間120日程度であり、1施設ごとの利用率としては低い状況である。なお、この内26日間は集団検診で利用している。
- ・各保健センターは、以下のような使い勝手の悪い面があり、本来、ワンフロアで検診等の業務を行うことが望ましい。
 - ✓西枇杷島保健センターは、構造上、声が反響して検診者に伝わりづらい。
 - ✓新川保健センターは、1階と2階をつなぐ階段に柵がなく危険である。
 - ✓清洲保健センターは、一度の検診人数が多い一方で、スペースが狭く混雑している。
- ・災害時の対応を考慮すると、保健センターに医療救護所を設置した方が連携しやすい。

二次評価における考え方

保健センターは、乳幼児や女性、高齢者の利用が多い施設であることから、集約に伴う施設のリニューアルを行うことにより、安心して各種検診ができる環境を整えると同時に、機能強化を図る。



二次評価(案)

(10) 庁舎等

対象施設

・その他義務的施設としては、下表に示す6施設がある。

施設名	小学校区	建築年度	経過年数	延床面積(m ²)	敷地面積(m ²)	一次評価結果(案)		
						ハード偏差値	ソフト偏差値	区分
市役所庁舎	新川	2016	2	12,119	19,080	60.7	—	—
西枇杷島庁舎	西枇杷島	1971	47	2,970	5,868	31.5	—	—
たんぼぼ園	西枇杷島	1983	35	769	483	48.6	—	—
学校給食センター	清洲	2014	4	3,628	7,849	69.4	—	—
にしびりサイクルセンター	古城	2007	11	122	392	67.0	—	—
春日資源回収ステーション	春日	1968	50	60	549	59.6	—	—

■消防団詰所及び資材・防災倉庫については、消防団組織等の観点に基づき、別途定めるものとする。

■春日グラウンド、西枇杷島汚水処理場、枇杷島駅東西自由道路は、土木インフラ施設として別途計画を定めるものとする。

(※)一次評価の判定区分

区分	A	B	C	D
ハード	○	×	○	×
ソフト	○	○	×	×

○：偏差値≥50

×：偏差値<50

施設の現状と課題

<庁舎>

・平成28年度に市役所庁舎を増築し、庁舎機能を集約したため、西枇杷島庁舎は用途を廃止している。

<たんぼぼ園>

・たんぼぼ園は、市内唯一の発達支援施設である。ただし、障害者総合支援法に基づく施設ではない。

<学校給食センター>

・学校給食センターは、旧町時代の4つの給食センターを1つに統合したもので、建築後4年の新しい施設である。現在は、市立小学校、中学校、幼稚園および保育園に給食を供給している。

<にしびりサイクルセンター>

・にしびりサイクルセンターは、主に特定の団体のリサイクル活動に使用している倉庫施設である。

<春日資源回収ステーション>

・資源回収ステーションは、春日地区だけでなく、各中学校区に設置されている。また、地区回収を行う場所は、市内に207箇所あり、資源回収の場所と機会は多く不自由することはない。

二次評価における考え方

西枇杷島庁舎は、隣接する西枇杷会館と同様に耐震性能に問題があり、現在、関係機関と調整中である。

たんぼぼ園と学校給食センターについては、今後も市としてサービスを提供していく上で必要であるため継続する。

にしびりサイクルセンター及び春日資源回収ステーションは、運営の効率化を図る上で、施設のあり方を検討する。

